

保育者・教育者の資質能力育成に関する一考察 —物語と音楽のコラボレート活動の事例から—

三藤恭弘・伊藤憲孝

福山平成大学 福祉健康学部
(こども学科)

E-mail : ymitoh@heisei-u.ac.jp

【要旨】

本研究の目的は、保育者・教育者養成において、育みにくいと考えられる「言葉に対する感覚」、「豊かな感性」、「感じたことを自分なりに表現する」といった資質能力を育むための知見を得ることである。研究の方法として、稿者らが学生と共同でおこなった文化的活動を事例として取り上げ、その活動に参加した学生の意識をアンケート調査によって質的に分析・考察し、上記目的を果たそうとする。

文化的活動の概要は、形態としては野外でおこなうピアノコンサートであり、その内容としてはピアノの演奏曲と「物語」をコラボレートさせることによって、ある種の感覚的世界を創造するものである。

分析の結果、学生たちは本活動を通して次のようなものを獲得した、あるいは向上させたことが明らかになった。一つは人前で表現することの「楽しさ」「喜び」「自信」「意欲」である。二つには、言葉や音楽に対する「感覚」「感性」である。三つには、これらに支えられ、自ら主体的に「工夫する」、「努力する」という学びの姿勢である。これら三つは、因果律による輪（サイクル）を構成し、有機的に繋がっていると見える。「言葉に対する感覚」、「豊かな感性」、「感じたことを自分なりに表現する」といった資質能力の育成には、このようなサイクルに学生を導く仕掛けが重要であり、そのような仕掛けづくりが求められると言えるであろう。

KEY WORDS : 保育・教育、物語、音楽

1. はじめに

保育者・教育者の養成課程における学生の資質能力の育成に関わっては、中央省庁が示す「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」や「教職課程コアカリキュラム」等に述べられている。だが、保育・教育の対象者である子どもたちに獲得させたい資質能力について考える時、その資質能力から逆算的に、〈学生に獲得させたい資質能力〉を推定することも可能であろう。

保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育保育要領においては、育みたい資質能力「言葉」「表現」に関わり、次のように示されている。

言葉

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

表現

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

言うまでもなく、保育者・教育者は子どもにとって環境要因そのものであり、保育者・教育者自身にまず上記のような資質能力が求められると言えるだろう。それは子どもが環境要因から影響を受けるという面と、上記のような資質能力を育成するのに、保育者・教育者にもそのような資質能力が備わっていることが保育・教育上有利であるだろうとの二面が考えられる。

だが、「言葉に対する感覚」、「豊かな感性」、「感じたこと（中略）を自分なりに表現する」といった資質能力は、どこかとらえにくく、育みにくい資質能力と言えるだろう。

では、保育者・教育者を志す学生を対象にした教育課程において、そのような資質能力を育むためには、どのような取り組みが求められるのだろうか。

2. 本研究の目的

本研究は、保育者・教育者養成において、育みにくいと考えられる「言葉に対する感覚」、「豊かな感性」、「感じたことを自分なりに表現する」といった資質能力を育むための知見を得ることが目的である。

3. 本研究の方法

本研究は事例として稿者らが学生と共同でおこなった文化的活動を取り上げ、その活動に参加した学生の意識

を分析することにより、上記目的を果たす。意識の分析は参加学生に対しておこなったアンケートを質的に分析、考察することによっておこなう。

4. 活動の概要

4.1. 形態：野外でおこなうピアノコンサート

4.2. 内容：ピアノの演奏曲と「物語」をコラボレートさせることによって、新たな感覚的世界を創造した。

4.3. 日時：2016年9月24日（土）午後6：00～7：15

4.4. 場所：福山平成大学13号館前芝生広場

4.5. 会場図：図-1、資料-1、2を参照

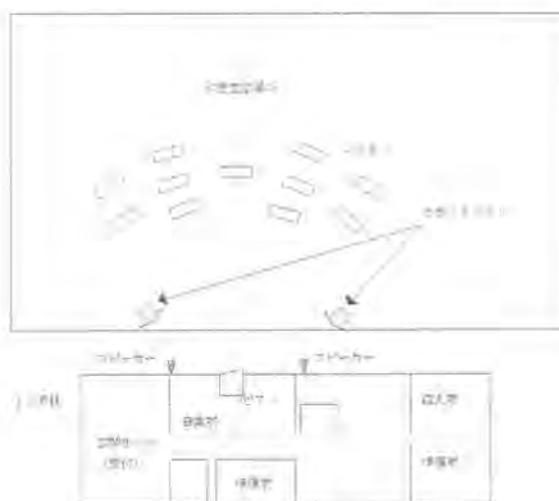


図-1 会場図

図-1における上方の長方形は芝生広場を表し、下方の長方形は学舎である13号館1階見取り図を表す。ピアノは1階音楽室の芝生広場側の扉を全開にして、会場向きに設置し、生音だけでは遠くまで聞こえづらいので、マイクで音を拾いスピーカーからも流した。また、朗読者はピアノの前、客席側に立って朗読をした。



資料-1 観客席側から見た開演前（午後5時）の会場



資料-2 開演後、観客席側正面から見た様子



資料-3 朗読者と演奏者の位置関係

4.6. 演奏者：伊藤憲孝

4.7. 朗読者：本学学生3名（Aさん、Bさん、Cさん。
それぞれのプロフィールについては6節に詳述。）

4.8. 聴衆者：地域住民の方々、学生（総数約180名）

4.9. ピアノ演目：

- ①橋爪皓佐：おもちゃのピアノによる5つの小さなファンファーレ
- ②ショパン：エチュードOp.10-12「革命」
- ③チャイコフスキー：「白夜」「秋の歌」～ピアノ曲集「四季」より
- ④三藤恭弘／ウィンストン：創作童話「スワロウ・テイル」～「あこがれ／愛」にのせて
- ⑤ドビュッシー：「プレリュード」「月の光」～ベルガマスク組曲より

⑥朗読「雪女」～即興演奏とともに

⑦ショパン：ワルツOp64-1 エチュードOp25-7、Op25-11「木枯らし」

4.10. 物語とのコラボレート内容：

上記演目において、物語とピアノ演奏のコラボレートを図ったのは③、④、⑥である。③はチャイコフスキーの「四季」の「5月－白夜」「10月－秋の歌」に付された詩を、Aさんが詩吟として吟じるとともに、伊藤憲孝がそれぞれの曲を弾いた。④はG.ウインストンのピアノ曲「あこがれ／愛」をモチーフにして三藤恭弘が創作した物語詩「スワロウ・テイル」をBさんが朗読した。⑥は日本の古典民話である「雪女」をCさんが朗読し、「雪女」をモチーフに伊藤憲孝が即興演奏を弾いた。

5. 活動への参加学生の意識調査の考察

本節では、以下の内容で実施したアンケートによって得られた参加学生の意識調査に対する考察をおこなう。

5.1. アンケート実施期間

2018年7月

5.2. 対象者

本活動において朗読をおこなった学生3名と本活動を支援してくれた学生1名（※本活動の表現内容自体には参加していないが、活動の準備や本番中の様々なサポートを行った。本活動の前年度におこなったコンサートに、連弾演奏者として参加した学生）。

5.3. 質問項目

〈質問1〉あなたの役割は何をすることでしたか。

〈質問2〉この活動を通して、あなたは保育者・教育者の卵として、どのようなことが身についたと感じますか。別紙資料、保育内容「言葉」／「表現」（「幼稚園教育要領」より抜粋）を参考にして、教えてください。

〈質問3〉上記内容以外で、あなたが保育者・教育者の卵として、身についたと思うことを答えて下さい。

〈質問4〉活動を通して、あなたはどんなことが楽しいと感じましたか。

〈質問5〉活動を通して、あなたはどんなことに苦労しましたか。

〈質問6〉活動を通して、音や言葉に対しての感じ方が変化したと思いますか。

〈質問7〉活動を終えて、今後どんなことが課題として残ったと思いましたか。

〈質問8〉活動を終えて、今後どんなことをやってみ
たい、学んでみたいと思いましたか。

〈質問9〉保育士・幼稚園教諭養成の観点からこの企
画を改善するならば、どんなことが考えられますか。

〈質問10〉活動を終えて、上記以外で感じたこと、
考えたことなど自由に書いてみて下さい。

6. 活動に対する参加学生の意識の考察

6.1. Aさんの場合

6.1.1. Aさんのデータ

活動時の学年：4年生

希望職種：小学校教諭、幼稚園教諭、保育士

現在の状況：公立小学校教諭

活動内の役割：詩吟の朗読

6.1.2. 意識調査の結果と考察

本活動を通してAさんは保育者・教育者の卵として次
のようなことが身についたと答えている。

〈質問2への回答〉【言葉】言葉の意味を調べ、相手
に伝わるように言葉を選択する。物語の背景や物語が
想像できるような文を構成する。【表現】物語から想
像を広げ、自由に表現する。音楽に親しみ、歌を歌
う。

〈質問3への回答〉沢山の人の前で歌うことで自信
を持つことができた。演じたり、人前で表現することの
楽しさを味わうことができた。

ここから見えてくることはAさんの「相手に伝」え
ようという表現への意欲である。それは、「言葉の意味
を調べ、相手に伝わるように言葉を選択」したり、「物
語の背景や物語が想像できるような文を構成」したりし
ようとする姿勢にも現れている。その結果として人前で
表現することへの「自信」を持つことができ、「演じた
り」「表現」したりすることの「楽しさ」を味わうこと
ができたのである。これらを可能にしたのは、仕掛けと
しての本活動である。では、Aさんは本活動のどのよう
な点を楽しんでいると感じていたのだろうか。

〈質問4への回答〉物語を自分なりに解釈し、新たな
文章に書き換えること。沢山の人の前で歌うこと。

前半は自らの手による言語的な創造の喜びであり、後
半はそれらを多くの人の前で表現する喜びを表してい
る。つまり本活動は、本論稿が取り上げる3つの資質能
力に関わる喜びを、Aさんに教育として提供することが
できたと言えるだろう。

もちろん、既に詩吟という活動をこれまで積み重ね、

本活動前に既に上記のような喜びを知り得ているのでは
ないかと考えることもできる。そのことに関してAさん
は苦労した点として次のように答えている。

〈質問6への回答〉沢山の人の前で話すことがあまり
得意でなかったため、非常に緊張した。物語を自分な
りに解釈し、文章にしたため本質や物語の情景を伝え
ることに難しさを感じた。

Aさんは「沢山の人の前で話すことがあまり得意でな
かった」と自己分析している。少なくとも人前での言語
を用いた表現活動については、苦手意識をもっていたよ
うである。もとよりだれにとっても「物語を自分なりに
解釈し、文章にしたため本質や物語の情景を伝えるこ
と」は、容易なことではない。だからこそそのような活
動に喜びを感じ、そのような活動への意欲を高め、その
意欲に支えられて努力を重ねていこうとする姿勢が重要
となる。

本活動を通してAさんが課題として今後に残したと自
覚していることは何なのだろうか。

〈質問7への回答〉詩吟のような伝統芸能は、若い人
たちに良さを伝えることが難しいということ。

これは表現メディアとしての「詩吟」が抱える現代に
おける課題でもある。ただし、伝統を守るといふことの
重要性や日本人としてのアイデンティティに関わる内容
は、本論考では扱わない。保育者、教育者としての資質
能力育成に向けた活動内容の検討という観点からは、詩
吟という文化メディアには課題も残っていると見えるだ
ろう。だが、Aさんは下記回答のように上記課題の解決
への道を探ることに意欲を高めているのである。Aさん
は本活動の改善に向けてどのようなアイデアを持ったの
だろうか。

〈質問9への回答〉保育所や幼稚園の子どもたちへも
参加を呼びかける。こども学科で学んだことを活かす
ために、ペープサートや絵本の物語に合わせた演奏を
学生と一緒にやる。

これはAさんの担当した演目③のみならず、活動全体
に対するアイデアとも言えるだろう。保育者・教育者
の資質能力育成の観点からすると、保育・教育の現場に
おけるより実際の場面の想定、という提案である。

6.2. Bさんの場合

6.2.1. Bさんのデータ

活動時の学年：2年生

希望職種：保育士、幼稚園教諭

現在の状況：4年生、保育所に内定

活動内の役割：朗読者

6.2.2. 意識調査の結果と考察

本活動を通してBさんは保育者・教育者の卵として次のようなことが身についたと答えている。

〈質問2への回答〉

【言葉】自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わうことができました。

【表現】自らの考えや思いを表現する楽しさや難しさを学ぶことができました。

Bさんは「言葉で表現する楽しさを味わうことができました。」と答えており、「言葉」と「表現」が分離したものでなく、そこに密接な関係性が存在することを示唆している。

また、「表現」においては、表現することの楽しさとともに難しさも感じ、表現技法習得の必要性を自覚していることが読み取れる。

さらに、上記以外のもので身についたものとして、次のように回答している。

〈質問3への回答〉表現する力や人前で分かりやすいように伝える力

質問2において、表現技法の習得の必要性を自覚しながらも、質問3では「人前で分かりやすいように伝える力」が本活動を通して伸びたと答えている。

さて、人前で表現することはほとんどすれば緊張感などを伴い、恐れへと繋がるものであるが、ここではBさんが人前で表現することを楽しいと感じていることに着目したい。

〈質問4への回答〉人前で表現すること

「保育指針」「幼稚園教育要領」「教育・保育要領」には、「自分なりの言葉で表現し」、「自分なりに表現することを通して」などとあるが、Bさんは自分なりの表現に関わる何かをこの活動で見つけたからこそ、このように楽しさを感じたのではないだろうか。では、Bさんが見つけた表現に関わる何かとは何であろうか。

〈質問5への回答〉ピアノにタイミングを合わせて朗読すること／分かりやすくピアノとのハーモニーに合わせること

〈質問7への回答〉人前で話す際のスピード

質問5への回答を通してBさんが2つの意図をもって本活動での朗読に取り組んでいたことがわかる。1つめは「タイミングを合わせて朗読すること」といった、技術的な側面へ注力する表現力向上の意図である。2つめ

は、物語世界の雰囲気表現するための「言葉」と「音楽」の色彩統合の意図である。「ピアノとのハーモニーに合わせる」とあるが、Bさんがおこなったのは朗読であり、例えば歌唱のようにピアノのハーモニーに合わせて音程を取る必要は全くない。ここでの「ハーモニーに合わせる」とは、ピアノの和声が奏でる色彩と自身の朗読の雰囲気を合わせることを示しており、声音と音色の統合、あるいは言葉の世界と音の世界の統合を意識していることが極めて重要である。

一方で質問7への回答にあるように、まだまだ研くべき表現技法があることも自覚している。

これらの回答からは、Bさんがさらに表現力を獲得しようとする意欲に満ちていたことがわかる。それは次の質問8への回答にもはっきりと書かれている。

〈質問8への回答〉もっと人前で表現したいと思いました。

「人前で表現」との記述からは単なる一方向で出来る閉じた空間での表現ではなく、対象者と相互の空間的交流を意識した表現であることがわかる。このことは幼稚園教育実習要領にある「表現」の内容(3)および「言葉」のねらい(2)に言及されている「伝えあう楽しさ」を味わうことへと繋がるであろう。

では、「言葉」と「表現」の創造的活動に関わる本人の変容について考察する。

〈質問6への回答〉より一つひとつの音や言葉に対して大切に思うようになりました。

〈質問10への回答〉とても楽しかったです。また参加したいです。

質問6への回答における、「音や言葉に対して大切に思うようになりました。」という記述は、本活動を通して普段身近にある音や言葉に対する感覚が研かれたことを意味しており、このような創造的活動体験の有用性は一過性のものではなく、継続的な特性をもつということでもある。また、質問10への回答からは、本活動を経てこのような創造的活動に参加する意欲が高まったことが読み取れる。

最後に、Bさんは保育士・幼稚園教諭養成の観点からこの企画の改善点をどのように考えたのだろうか。

〈質問9への回答〉もう少し子どもの好むような子ども科らしい曲があっても良いのではないかと思います。

本回答からは、自身が将来関わる子どもを聴衆として想定し、自身がどのように「言葉」を扱い「表現」する

のかだけでなく、職業的な視点ももっていることがわかる。

6.3. Cさんの場合

6.3.1. Cさんのデータ

活動時の学年：2年生

希望職種：小学校教諭、幼稚園教諭、保育士

現在の状況：4年生、小学校教員採用試験合格

活動内の役割：「雪女」の朗読

6.3.2. 意識調査の結果と考察

本活動を通してCさんは保育者・教育者の卵として次のようなことが身についたと答えている。

〈質問2への回答〉【言葉】(4)人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。(7)生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。◎(8)いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。◎(9)絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。【表現】(6)音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりするなどの楽しさを味わう。◎(8)自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

〈質問3への回答〉聴き手に物語のイメージが伝わるよう声の大小、高低や間の取り方など工夫して表現する力。

質問2への回答の中にある番号は、保育指針、幼稚園教育要領、教育保育要領に示される内容に付された番号である。番号の前についた「◎」は本人が「特にこの項目」という意味でつけた二重丸を表している。

これらを概観すると、本人が本活動を通して多くの点で育った、学んだと自覚していることがわかる。特に◎がついた項目はその意識が高いと見ることができるが、まず【言葉】の「(8)いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。」については、本活動が本人にとってイメージを豊かに広げる活動であったことを意味していると言えるだろう。また、同じく【言葉】の(9)に関する記述、あるいは【表現】の(8)に関する記述からは、「想像する楽しさ」「表現したり、演じたりするなどの楽しさ」を学生自身が味わうことができたこと強く自覚していることがわかる。「楽しさ」というキーワードに関わっては質問4でも尋ねているが、Cさんは次のように答えている。

〈質問4への回答〉「雪女」の朗読にあわせた即興のピアノ演奏が一回一回違うので、その都度表現やイメージに変化がある点。

本「雪女」の朗読であるが、「雪女」の原文は固定されており、ピアノの演奏がその時その時の即興演奏、という表現スタイルをとっている。そのため、朗読者であるCさんは原文の定まる「雪女」を朗読しつつ、演奏の都度変わる即興演奏によって全体のイメージも変わるという点を「楽しい」と感じていたわけである。この点に関わっては質問6の回答における下線部の文言に着目したい(下線は稿者による)。

〈質問6への回答〉「間」の使い方
言葉がなく音だけの場での感じ方が変化

これは明らかに本人の音に対する感覚が鋭くなったことを意味している、つまりこのような活動は本人の資質(感覚、感性)を育むことに寄与すると言えるだろう。

能力の面においては、本活動において先に提示した「身についたこと」に対する回答とあわせ、「苦勞したこと」「課題として残ったこと」「今後やってみたいこと、学んでみたいこと」に対する回答を考察してみた。

〈質問5への回答〉もともと滑舌が悪い為、朗読をする際に何度も囁んで言い直すことがあった。→口を大きく開けてははっきりと言葉を発するよう意識した。

〈質問7への回答〉相手(聴き手)にイメージを分かりやすく伝えるには、どのような工夫が必要なのかという点。

〈質問8への回答〉聴き手はイメージをどのように捉えるのかの分析。聴き手→大人や子どもの視点の違い等。

質問5においては自分自身の表現能力、技能における課題を自覚しつつ、それを乗り越える方法を考え、努力している姿が見て取れる。その結果として、質問2、3の回答における能力、技能が身についたと言えるだろう。また、活動を終え、今回積み残しとなった課題として、自分のイメージを相手に伝えるには、他にどのような工夫(方法)があるのか、ということを考え、さらに聴き手はイメージをどのようにとらえるのか、大人と子どもという年齢の違いによる聴き手の違いは何なのかということについて、今後学んでいきたいと考えている。これは本活動が〈学びのサイクル〉として一つの理想形を形作る〈きっかけ〉になっているということだろう。

最後に本活動を改善するアイデアについてCさんの

回答について考察してみたい。

〈質問9への回答〉今回は朗読の際にステージで行ったが、動作を取り入れても良いと思った。動作→例えば場面でのイメージに合わせた動作（劇化）を少し取り入れる等。

音楽の演奏も物語の朗読も、ある種の心内イメージを誰かと共有したくておこなっている活動であると言えるが、表現者によって音楽を選ぶか言葉を選ぶかメディアの選択はそれぞれである。そこに身体表現というメディアが加わるということは、表現者にとってさらに選択肢を増やすことにもなる。もとより、「演じて遊ぶ」という活動は保育、教育を通して大切な表現活動の一つであることは言うまでもない。そのことに言及したとも言えるCさんの回答である。

6.4. Dさんの場合

6.4.1. Dさんのデータ

活動時の学年：2年生

希望職種：幼稚園教諭、小学校教諭、児童発達支援施設

現在の状況：4年生、児童発達支援施設に内定

活動内の役割：活動支援者、前年度奏者（※本活動の表現内容自体には参加していないが、活動の準備や本番中の様々なサポートをおこなった。また、前年度におこなった本活動に、連弾演奏者として参加した。）

6.4.2. 意識調査の結果と考察

本活動を通してDさんは次のようなことが身についたと答えている。

〈質問5への回答〉連弾での合わせ。（2人で弾くという事でしっかりと息の合った演奏をしなければならない）

〈質問2への回答〉

【言葉】

見たり聴いたりした感想や、印象などを他の相手に分かるように話す力。友だちが朗読していた詩（スワロウテイル）に興味をもって聞き、その楽しさを味わう力。

【表現】

連弾において、この曲はどのようなイメージか、どう表現すればいいかなどを考えながらピアノを弾く力。

Dさんの本活動における前年度の役割は、連弾でピアノ演奏をすることであり、本年度の役割は活動の支援であった。それに関わらず、「言葉」において「感想や、印象などを他の相手に分かるように話す力」が身に

ついたと答えている。楽器を使い音楽を演奏することは言葉を用いないが、上記回答の背景には、リハーサル（本活動に向けて5回のリハーサルを行った）において、自身の抱く作品への印象や、思い描く音色を言葉にして共演者である稿者（伊藤）とやり取りしたことが影響していると考えられる。他者の言葉による表現に対し興味が高まったことは、保育内容領域「言葉」「表現」の両面から上記内容を身につけたことが分かる。特に「表現」に関しては、明確なイメージをもちながらピアノを演奏することが出来るようになったことが読み取れる。

また、上記以外では以下のような力が身についたと答えている。

〈質問3への回答〉大勢の人前に出て、話をしたり、演奏を行う力

「人前」で何かを伝えたり表現したりすることが、保育者・教育者にとって重要であることは言うまでもないが、Dさんは本活動を通して、自身のこのような能力の成長を実感している。

また、Dさんは本活動を通して、自身の演奏曲であるクラシック音楽（ドビュッシー）だけでなく、他出演者の様々なジャンルにおける表現にも興味をもっており、それらを聴衆とともに共有することに喜びを見いだしていることもわかる。

〈質問4への回答〉様々なジャンルの音楽に触れる事。見ている人と一緒に音楽を楽しめること。

一方でDさんが、技術的な困難さを感じていたことも読み取ることができる。

〈質問7への回答〉人の前で緊張せずに話したりできるような力。表現力。

技術的な困難を乗り越え、なお人に伝える「表現」の難しさを感じている。そして、演奏のみの出演であったにも関わらず、ここでも「言葉」の側面に言及し、課題として感じていることは重要である。

また、これらの活動を通して、Dさんが自身からの一方的な「表現」でなく、演奏者と聴衆が相互に関わる活動へと繋げる意欲をもったことが次の回答からわかる。

〈質問8への回答〉お客さんといっしょに何か出来るような活動。

では、「言葉」と「表現」の創造的活動に関わる本人の変容についてはどうだろうか。

〈質問6への回答〉音や言葉に対して、前よりも耳を傾けるようになった。

〈質問10への回答〉このピアノコンサートでは、毎回聴きにきてくれる方もいて、良かったという感想をきくことが多いので、これからも続いてほしいです。

質問6への回答では、「音や言葉に対して、前よりも耳を傾けるようになった。」と記述しておいり、本活動を通して普段身近にある「音」や「言葉」に対する感覚が研かれたことを意味しており、このような創造的活動体験が、やはり一過性のものではなく、継続した有用性をもつということがわかる。また、質問10への回答では、本活動を体験し、このような活動が継続的に実施されることを望んでいる。そこには、参加した本人だからこそ実感する教育としての有用性も読み取ることができるであろう。

最後に、Dさんは保育者・教育者養成の観点からこの企画の改善点をどのように考えたのだろうか。

〈質問9への回答〉子どもが知っているような曲や活動を取り入れる。

本観点からは、Bさんと同じく自身が将来関わる子どもを聴衆として想定し、自身がどのように「言葉」を扱い「表現」するのかだけでなく、職業的な視点からの構想をもっていることがわかる。

7. まとめ

前節において各学生の意識調査に対する個別の考察をおこなった。本節では、それらを総括し、本研究の目的である、「言葉に対する感覚」、「豊かな感性」、「感じたことを自分なりに表現する」といった資質能力を育むための知見を得る。

まず、本活動に参加した学生は本活動によって何を達成することができ、どう変容したのだろうか。

一つは人前で表現することの「楽しさ」「喜び」であり、そこから得られる「自信」と更なる活動への「意欲」である。特に「もっと人前で表現したい」、「お客さんといっしょに」という学生の言葉からは、自分の表現を多くの人に共有してほしいという表現の本質的喜びがよく伝わってくる。その「楽しさ」「喜び」を知り得たからこそ、それらが原動力となって彼らを次なる表現に駆り立てていると考えられる。

二つには、言葉や音楽に対する「感覚」「感性」である。「一つひとつの音や言葉に対して大切に思うようになりました」、「音や言葉に対して、前よりも耳を傾けるようになった」、「言葉がなく音だけの場での感じ方が

変化」、「ピアノとのハーモニー」等の言葉からは、「語感」「音感」といったものが養われつつある様子が見て取れ、彼らの感覚、感性はより繊細に、鋭敏に変容しつつあると言えるだろう。

三つには、これらに支えられ、自ら主体的に工夫する、努力するという学びの姿勢である。「緊張」感を覚えたと述べる学生は複数いた。しかし、それでもまた人前での表現活動をおこないたいと述べている。あるいは、自らの心内イメージを音や言葉を用いて表現し、人と共有しようとするものの難しさを感じつつも、「声の大小、高低や間の取り方など工夫」したり、「どう表現すればいいかなどを考えながらピアノを弾いたり」、「ピアノにタイミングを合わせて朗読」したり、「物語の背景や物語が想像できるような文を構成」したりといった工夫、努力を重ねている。

これらの三つは、因果律による輪（サイクル）を構成し、有機的に繋がっていると考えるだろう。学生たちは活動への取り組みを通して、表現の「楽しさ」「喜び」を味わったからこそ、より良い表現へ向けて自ら工夫、努力を重ねるのである。また、工夫、努力を重ねる過程において「感覚」や「感性」は研かれ、より研ぎ澄まされていく。

これらをもとに、本論稿の問題意識である、学生に対して育みにくいと考えられる「言葉に対する感覚」、「豊かな感性」、「感じたことを自分なりに表現する」といった資質能力の育成について、本論考から得られた知見をまとめる。

言うまでもなく「言葉に対する感覚」、「豊かな感性」、「感じたことを自分なりに表現する」といった資質能力は、「教える」という教授活動によって育まれるような資質能力ではない。より良いもの、より高次なものとの接触によって感化され、研かれていくものであろう。だが、鑑賞的な教授方法にも限界はある。本人の興味・関心・意欲が立ち上がらない場合である。つまり感覚、感性の世界でより高次の次元を味わいたいと本人が思った時に、先述のサイクルが発動し、そのサイクルの中で学生は自らの感覚、感性を高めていく。保育者・教育者の養成課程におけるこのような資質能力を高めていく上で、先のようなサイクルに学生を導く仕掛けが重要である。学生はこのようなサイクルの中に一度身を置けば、自らサイクルを回り続ける。今回取り上げた活動には、そのような有用性を認めることができた。それはアクティブラーニングの趣旨とも大いに関わっていると

えるだろう。

A Research on Nurturing the Qualities of Childcarer and Educator
—in a Case of Collaborative Activities of Narrative and Music—

Yasuhiro MITOH, Noritaka ITO

Department of Childhood Education,
Faculty of Welfare and Health Science,
Fukuyama Heisei University

Abstract

The purpose of this research is to attain necessary knowledge for cultivating qualitative abilities such as “feelings for words,” “rich sensibility,” and “expressing oneself in one’s own way,” which are thought to be difficult to nurture during the training process of childcarers and educators. We chose cultural activities the authors of the study had held with students as our main case for the study. A questionnaire survey was conducted among the students who had participated in the activities to qualitatively analyze and study their awareness level. “The cultural activities” refers to the outdoor piano concerts the authors have performed. By incorporating “narrative,” the piano concerts were designed to create a sort of sensory world. The results of the survey show that the participating students attained or improved the following groups of qualities through the activities. The first group includes “enjoyment,” “joy,” “self-confidence,” and “motivation,” which the participants experienced when performing before the audience. The second group includes “sense” and “sensibility” towards words and music. And the third group includes learning attitudes; namely, “devising” and “endeavoring,” which are supported by the prior two groups. We discovered that these three groups constitute a cycle of cause and effect, and also that they are organically connected with each other. We conclude that in order to cultivate the qualitative abilities such as “feelings for words,” “rich sensibility,” and “expressing oneself in one’s own way,” the creation of a mechanism to guide students through such a cycle is important and necessary.

KEY WORDS : childcare/education, narrative, music